16 世紀～ 18 世紀における日本とベトナムのダン・チョンとの関係
――日本に保管される文献資料および遺物から

チャン・ドック・アィン・ソン

要旨

2013 年 4 月末から住友財団基金（日本）の資金で、我々は「16 世紀～ 18 世紀における日本とベトナムスーダンチョンとの関係」というテーマで研究を進めてきた。本研究はチャン・ドック・アィン・ソン博士（ダナン経済社会研究開発院）が率い、ファン・ハイ・リン博士（ハノイ国家大学の人文科学大学）とファン・タン・ハイ博士（フエ故都遺跡保存センター）の協力を得て実現された。

科学的な目的以外としては、本研究では 16 世紀～ 18 世紀における日本とベトナム中部との外交、交易、文化などに関する史料や物品を探して、ダナン日本文化交流センターに展示するアイテムを構築することも目指したい[1]。

本研究を進めている間に、我々は 2 回訪日して、日本で保管されている[2]、このテーマに関連する史料と物品を調査・検索した。この旅で我々はテーマに関連する大量の史料と物品にアプローチし、調査・複製・検索した。これらの史料と物品は我々が調査・研究を行った日本の県や都市の図書館、文書所、博物館、寺院などに展示・保管されていた。その中には、日本政府により重要文化財として認められているものも多かった。

本セミナーでは、我々は 16 世紀～ 18 世紀における日本とベトナムスーダンチョン[3]の交易関係に関連するいくつかの史料と物品を紹介したい。これは上記の研究テーマの一部である。16 世紀～ 18 世紀における日本とスーダンチョンとの関係を反映した史料と物品を選定して、本セミナーで紹介する理由は、16 世紀～ 18 世紀

1　ダナン日本文化交流センターは、ダナン市委員会とベトナム日本交流促進センター（NPO）の協力でダナン市グー・ハイン・ソン区に建設中である。2016 年の終わりに正式に開設される予定である。

2　最初の旅は 2013 年 7 月 9 日から 7 月 21 日までチャン・ドック・アィン・ソン博士により主催され、堺（大阪府）、沖縄、福岡、長崎と島根を訪問した。2 回目の旅は 10 月 16 日から 10 月 22 日までチャン・ドック・アィン・ソン博士とファン・ハイ・リン博士により主催され、東京、名古屋、大阪と松阪（三重県）を訪問した。

3　当時、ダンチョンは日本人によって交趾（ジャオチー）、安南（アンナン）、広南（クアンナム）など、様々な名前で呼ばれていた。

にかけて日本とベトナムスーダンチョンとの間で外交や交易といった交流がかなり活発になり、そうした交流活動が大量の文献・史料に記録され、現地および日本とベトナムの博物館にその痕跡が残っているからである。

便宜上これらの史料と物品を、文献・考古学的な遺物・美術館の物品という三つのタイプに分けて紹介する。

1. 文献

文献史料は日本とベトナム、特に日本とスーダンチョンとの関係を示しており、この数十年の間に日本とベトナムの多くの学者により考究・発表された。今回のセミナーでは、我々が最近、調査および史料の検索に日本へ行って直接アプローチ・考究した文献だけを紹介する。それらは東洋文庫、東京大学図書館、慶應義塾大学図書館、昭和女子大学図書館、関西大学図書館、九州国立博物館、長崎歴史文化博物館などの図書館、登記所、博物館などに保管されていたものである。

アプローチ・考究した文献の中で、特に注意すべきものは次のものである。

1. 院王とクアンアンの領域の支配者から日本の支配者へ送られた、両国間の外交と交易を認めた9通の手紙のコレクションである。これらの手紙は1591年、1609年、1610年（2通）、1611年、1624年（2通）、1672（2通）に書かれたものである（写真1）。その中で、特に注意すべきものは、『クアンフン』14号（1591年）に“An Nam quốc Phó đô đường Phúc Nghĩa Hầu Nguyễn Thư giản”という人物が日本の支配者に送った、安南国（スーダンチョン）との外交関係を樹立することを提案する手紙である。これは、現在までに発見されたスーダンチョンの政府が日本の支配者に送った手紙のうち、一番古い年代のものである。[4]

2. 4通の朱印状があるコレクション。幕府が1604年（2通）、1605年（2通）、1614年に発行し、17世紀初頭に日本の商船がスーダンチョンへ来航して交易するのを許可したものである（写真2）。[5]

3. 1617年と1633年に日本の商人が、日本の商船の積荷購入についてスーダンチョンの窓口担当者と取り交わした2枚の契約書のコレクションである（写真3）。[6]

4. スーダンチョン政府が1632年に日本の支配者に贈った贈り物の目録である（写真4）。[7]

5. 17世紀の4枚の手紙のコレクション。江戸時代の日本の角屋という名高い商

4 本資料は現在福岡県の九州国立博物館に保管されている。

5 上に同じ。

6 本資料は現在福岡市の博物館に保管されている。九州国立博物館により2013年6月14日～2013年9月6日にかけて開催された「The Great Story of Vietnam」展で展示された。

7 本資料は日本の重要文化財として認められた。同じく「The Great Story of Vietnam」展で展示された。

写真 1　院王から日本政府へ提出された手紙

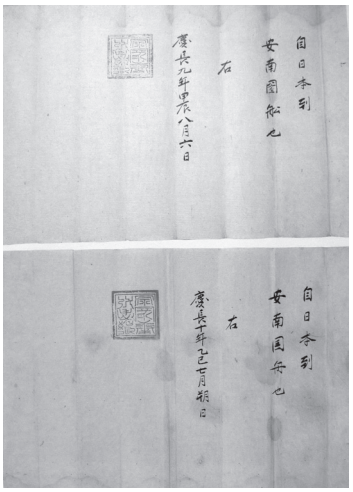
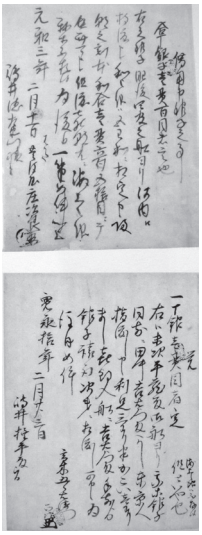
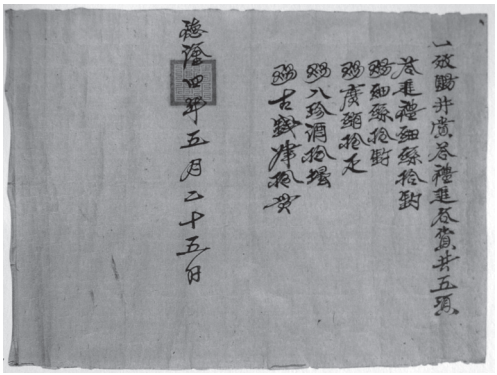
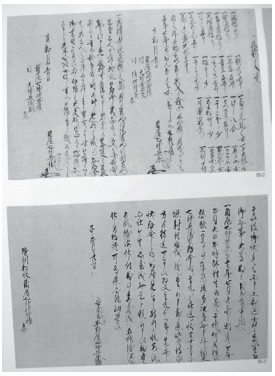


写真 2　朱印状があるコレクション







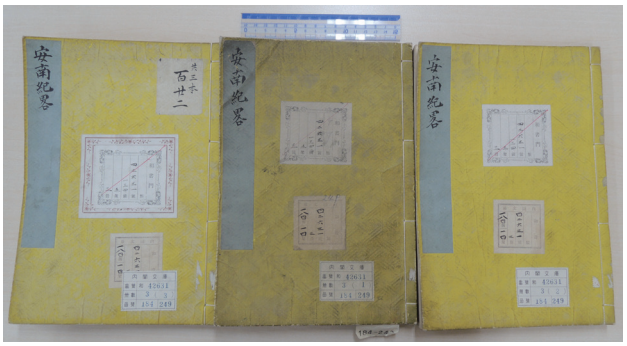
左：写真 3　日本の商人がスーダンチョンの窓口担当者と交わした 2 枚の契約書
中：写真 4　スーダンチョン政府から日本政府への贈答品目録
右：写真 5　17 世紀の角屋という名高い商人家族からの手紙

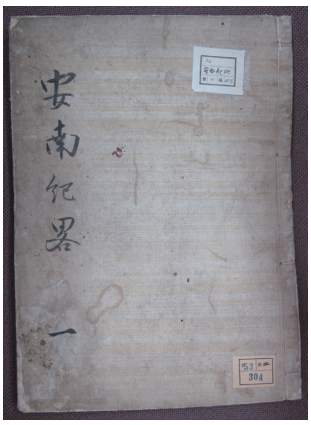
人家族からの手紙であり、16 世紀～ 17 世紀の間の日本とスーダンチョンとの交易活動に関して、家族同士でやり取りした手紙である（写真 5）[8]。

6.　徳川幕府の官吏である近藤重蔵が 1795 年～ 1797 年の間に編纂した『安南紀略藁』の手書きの作品。『安南紀略藁』は漢文と日本語で書かれ、16 世紀～ 18 世

8　本資料は現在博物館に保管されており、日本の重要文化財として認められている。こちらも「The Great Story of Vietnam」展で展示された。

紀の間にスーダンチョンを訪れた日本人の口頭伝承に基づいてスーダンチョンの歴史、習慣や文化を記録したものである。その中には、将軍徳川吉宗が1728年にクアンアンで2頭の象を買い日本に持ち帰ったというエピソードの後で、クアンアン人の象使いが口頭で語るクアンアンでの象についての文章がある。[9]





上：写真6　『安南紀略藁』の手書きの作品（3冊）
左：写真7　『安南紀略藁』の手書きの作品、安南紀略藁（2冊）
右：写真8　『安南紀略藁』の手書きの作品、安南記略（3冊）

日本の多くの図書館と文書所は近藤重藏による『安南紀略藁』の異なる手書きバージョンを保管している。島尾稔教授（慶應義塾大学）の支援を得て、我々は次のバージョンにアプローチできた。

・『安南紀略』と名付けられたバージョンは3冊あり、国立古文書館に保管されている（写真6）。
・『安南紀略藁』となっているが、内容が違うバージョンが二つある。それ

9　ファン・ハイ・リン「徳川吉宗将軍のクアンアン象」『ダナン経済社会発展』第30号、2012年6月、項39～48を参照。

ぞれ 2 冊あり、慶應義塾大学図書館に保管されている（写真 7）。

・『安南紀略』と名付けられたバージョンは 2 冊あり、島尾稔教授の所蔵物である（写真 8）。

上記の四つのバージョンすべて、年代は 1797 年である。

7. 8 枚ある彩色画セットには、スーダンチョンの人々の衣装、船、作業道具、武器各種と生活風景が描かれており、東洋文庫に保管されている。近藤重藏の『安南紀略藁』のイラストである。島尾稔教授の考究によると、この彩色画セットは 1817 年にリーギアという人物により描画されたという。

写真 9 『安南紀略藁』のイラスト

東洋文庫の彩色画セット以外では、東京大学の資料室にも植物紙の上に黒インクで描画し赤色で色付けられた絵画セットが保管されている。それも『安南紀略藁』のイラストである。近藤重藏が『安南紀略藁』を書いた時期（1795 ～ 1797 年頃）と同じ頃に描画されたと言われている。現在、東洋文庫に保管されている。これら二つの絵画セットの表現内容および絵の数は同じだが、サイズ・色・細部の装飾模様と注釈文などはかなり違っている。[10]

8. 『安南漂流記』の手書きのバージョンは、1675 年に水戸市の漁民が航海中に

10 東洋文庫に保管されている彩色画セット以外に、*An Nam quốc giang phiêu lưu phong tục hồng sinh đồ* という類似の彩色画セットもあり、台北にある台湾国立図書館に保管されている。この 2 セットは、絵の数と描画内容は同じだが、注釈の内容が違っている。

スーダンチョンに漂流したことを語っている。彼らはしばらくの間スーダンチョンに滞在し、1766 年にスーダンチョンから広州（Guangzhou）へ、それから浙江（Zhejiang）へ行き、長崎（日本）に戻った[11]。我々は 18 世紀～ 19 世紀までの八つのバージョンの『安南漂流記』へアプローチした。それらは、「安南記」「安南国漂流記」「安南国漂流誌」「南瓢記」など、様々なタイトルが付いている。そのうち、5 冊は島尾稔教授の所蔵物で、残りの 3 冊は菊池誠一教授（昭和女子大学）の所蔵物である（写真 9a ～ 9l）。

2. 考古学的な遺物

文書化された史料へのアプローチ・考究のほか、我々は堺（大阪）、那覇（沖縄）、福岡、長崎などの都市の考古学センターを訪れたり、直接沖縄の遺跡の今帰仁城や首里城も訪れたりして、日本とベトナムの間の交流に関連する古代の遺物を調査した。これらの遺物は日本の古代の港市場や城跡から出土された。これら遺物のほとんどは陶器であり、スーダンチョンに起源を持つものはチャンパ陶器、フォクティック陶器（トゥアティエンフエ省）、タンハー陶器（ホイアン省）、ゴサイ陶器（ビンディン省）などであり、スーダンゴアイ（交趾国）に起源を持つものはチューダウ陶器（ハイズオン省）、タンロン陶器などである。詳しくは以下の通りである。

2.1. 堺市で

堺は日本の関西地方の活気ある商業港で、大阪港の前港であった。日本と朝鮮・中国・東南アジア諸国間の海上交易の重要な拠点であった。15 世紀より、堺市から多くの日本の商船が北東アジアおよび東南アジアの諸国へ行って交易を拡大した。中国や朝鮮からの商船もしばしば堺港を訪れた。

近年、堺市立埋蔵文化財センターの考古学者が堺市の古い港湾地域内の様々な地点を発掘調査した。彼らは、日本陶器と中国陶器のほかにベトナム陶器も数多く発見した。堺で見つかったベトナム陶器の一部には青白陶器もあり、年代は 15 世紀から 16 世紀の間で、スーダンゴアイ（交趾国）に起源を持っている。その他、瓶やジャーもあり、チャンパ陶器の素焼き（15 世紀）やゴサイン陶器（ビンディン省）、16 世紀～ 18 世紀に作られたフォクティック陶器（トゥアティエンフエ省）のうち茶色の釉薬の陶器に属するもの（写真 10b および 10c）もある。それは、スーダンチョンの陶器が 16 世紀～ 18 世紀の間に堺に輸入されたことの証拠である。

11　彼らは自らの旅とダンチョンで体験したことを長久保赤水という人物に語った。長久保赤水はその後、『長崎行役日記』を書いた。

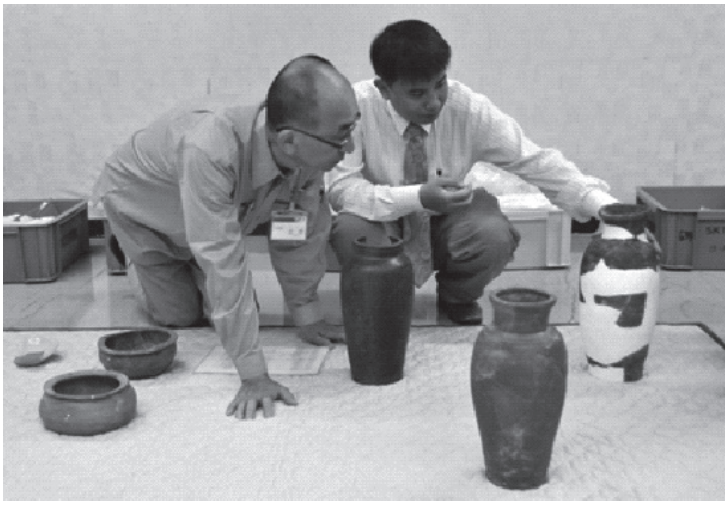


写真 10　堺で見つかった 16 世紀～ 18 世紀のベトナム陶器

2.2.　沖縄県で

沖縄は現在日本の領土である。14 世紀半ば以降、琉球は地域内の他国と交易を始めた。15 世紀に入ると、この海上交易は大きく発展した（写真 11）。沖縄県埋蔵文化財センターが提供してくれた考古学的発掘調査の結果によると[12]、1419 年から 1570 年までに、琉球は、交易のために 116 の商船をシアムとパタニ（タイ）、安南（ベトナム）、マラッカ（マレーシア）、パレンバン、スマトラ、ジャワとスンダ（インドネシア）を含めた、東南アジアの各港へ派遣した。これらの商船の多くはタイとインドネシアの港行きであったが、唯一、1 隻の琉球商船が 1509 年に安南に到着している。この報告によると、これらの商船は東南アジアから大量の商品を購入して琉球へ持って帰っている。そのほとんどは陶器であった。近年、沖縄首里城の京の内御嶽遺跡（写真 12）の発掘調査で、日本、中国、タイ、ベトナムからの数千の陶器が発見された。なかでも、ベトナム陶器は非常に多様であり、年代が 15 世紀頃のものであるゴサインの青磁、白磁、茶色の釉薬の陶器とチュウダウの青白陶器などが見つかった（写真 13a ～ 13b）。

また、北沖縄の今帰仁城遺跡（写真 14）でも、日本の考古学者が、年代が 15 世紀～ 16 世紀頃のチュウダウの青白陶器など、一部、ベトナム陶器を発掘している（写真 15）。

12　沖縄考古学センターの研究者である金城亀信が提供してくれた首里城遺跡の発掘結果の概要報告（日本語と英語）。タイトルと出版年は不明。全部で 13 項あり。

左：写真 11　琉球と地域内の各国との海上交易を表す地図（沖縄県埋蔵文化財センター展示パネルより）
右：写真 12　沖縄首里城の京の内御嶽遺跡

写真 13a–13b　沖縄の京の内御嶽遺跡で発掘された 15 世紀ベトナムのゴサインの青磁、白磁、茶色の釉薬の陶器とチュウダウの青白陶器

左：写真 14　今帰仁城遺跡
右：写真 15　今帰仁城で発掘されたチュウダウの青白陶器

2.3.　福岡県で

福岡は日本の有名な肥前陶器の拠点であるが、中国、タイ、ベトナムなど他国から大量の陶器を輸入したところでもある。近年では、福岡市埋蔵文化財センターの考古学者が古代から存在した福岡の様々な港を発掘調査し、日本、中国、タイ、ベトナムなどの陶器を数多く発見している。特にベトナム陶器については、福岡考古学センターに保管されている遺物を調査した我々の判断によると、そのほとんどは 15 世紀のチャンパ陶器、ゴサイン（ビンディン省）の青磁、白磁であり、年代が 16 世紀頃の北ベトナムの陶芸窯から作られた花陶器もわずかに含まれていた（写真 16）。

写真 16　福岡で発見されたベトナムの 16 世紀頃の陶器

2.4.　長崎市で

長崎は 16 世紀から 18 世紀にかけて日本の最も重要な港であり、日本の海上交易の歴史の中で重要な役割を果たしていた。世界の大交易時代（16 世紀～ 17 世紀）における海上の「陶器のロード」､「シルクロード」の一番活気のある交易拠点であった。江戸時代の日本の商船の出航元であると同時に、世界中から商船を受け入れたところであった（写真 17）。もちろん、陶器はこの港を介して商船が輸出入した重要な品目の一つである。

長崎考古学センターの考古学者は長崎港の様々な地点を発掘調査して、日本陶器と中国陶器のほか、江戸時代のものと思われるベトナム陶器も数多く発見した。長崎で発掘されたベトナム陶器のほとんどは年代が 16 世紀～ 17 世紀のもので、スーダンゴアイ（交趾国）陶器の碗や皿、チャンパ陶器の素焼きの瓶やジャー、ゴサイン陶器の碗および茶器である茶色の釉薬の陶器と白磁などである（写真 18）。

堺、沖縄、福岡、長崎などの考古学的遺跡におけるベトナム陶器、特にスーダンゴアイ（交趾国）陶器の出土について説明する。日本の考古学者のほとんどが、それが、15 世紀～ 18 世紀の、日本の商船が地域内の他国との交易ネットワークを拡大している際の、日本とベトナム間の海上交易の結果であることに同意している。当時、ベトナムのスーダンチョンは沿岸に非常に発展した港市場ネットワークを持っていた。代表的なものはタンハー港（トゥアティエンフエ省）、ホイアン港（クアンアン省）、ヌオクマン港（ビンディン省）であり、交易に訪れた日本の商船を歓迎して品物を輸入し、チャンパ陶器、フォクティック陶器、ゴサイン陶器などを日本へ輸出していたところでもある。これは 15 世紀～ 18 世紀の間の、日本とスーダンチョンとの交易関係を示す生き生きとした証拠である。

左：写真 17　江戸時代の日本の商船の出航元である長崎港
（九州国立博物館『海のむこうのずっとむこう』フレーベル館、2009 年より）
右：写真 18　長崎で発掘された 16 世紀～ 17 世紀頃のゴサイン陶器の碗・茶器

3.　博物館の物品

2013 年に 2 回実施した日本での研究・調査旅行で得られた有意義な成果の一つは、日本の博物館・美術館・神社・寺院などに展示・保管されている、日本とスーダンチョンの関係を映し出した物品の調査、アプローチ、考究である。我々は幸いにも大量の珍しい貴重な物品にアプローチできたが、その中には日本の重要文化財もあった。典型的なものは次のとおりである。

1.　17 世紀の滝見観世音菩薩像の絵（写真 19）。この絵は元はクアンアンの五行山寺院の物である。その後、阮王時代に、スーダンチョンで取引をしていた日本の江戸時代の有名な貿易商人である茶屋一族に対して、その貢献を称えて阮王がこの絵を贈った。この絵は現在浄妙寺（愛知県）に奉られている。

2.　17 世紀の新六交趾渡航図巻 71.8cm × 511.8cm）。茶屋一族による長崎からジャオチー（すなわちスーダンチョン）への朱印船交趾貿易を描いた「茶屋船交趾渡航

交易絵巻」である（写真 20a ～ 20d）。この絵は現在浄妙寺に保管されており、愛知県の重要文化財に指定されている。

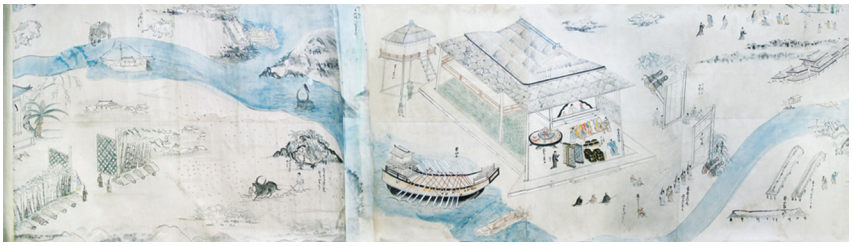
3.　16 世紀末から 17 世紀初頭にかけての朱印船交趾渡航図巻絵巻（32.8cm × 1100.7cm）。日本の商船が交易のために海を渡ってスーダンチョン（広南国）に向かう旅を描いた。長崎港から出航し、クラオチャム島を経由してホイアン港に入港し、取引や売買を行った。その後、商船はフースアンへ行って阮王に謁見して贈り物を献上した（写真 21a ～ 21e）。この絵は現在九州国立博物館（宰府市、福岡県）に保管されており、日本の重要文化財となっている。

写真 19　滝見観世音菩薩像

a

d

b



c

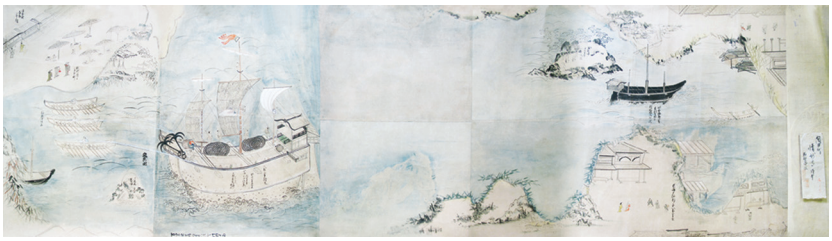


写真 20a–20d　17 世紀の茶屋家による新六交趾渡航図巻

a

b

c

d

写真 21a–21d　朱印船交趾渡航図巻絵巻（17 世紀後半～ 18 世紀前半）

4.　17 世紀の金箔の漆箱の上に備え付けられた木製枠の鏡（38.6cm × 34.5cm）（写真 22）。商人荒木宗太郎の妻であるアニオー姫がベトナムから日本へ持ってきて、日本に住んでいた時に使った記念の品である。アニオー姫はおそらく日本人と結婚した初めてのベトナム人女性だと思われる。フランス人研究者（Doumotier）とベトナム人研究者（レー・グエン・リュウとグエン・ダック・スアン[13]）によれば、アニオー姫は阮福源王（1613 年～ 1635 年の支配）の娘であり、商人荒木宗太郎（阮福源王が彼にグエン・ダイ・ルオンというベトナム語の名前を与えた）と結婚した[14]。この鏡は長崎歴史文化博物館の所蔵物である。

5.　19 世紀の崎陽諏訪明神祭祀図絵巻（36.1cm × 1003cm）。商人荒木宗太郎の妻であるアニオー姫を称える長崎の諏訪明神祭を描いたものである。アニオー姫は屋

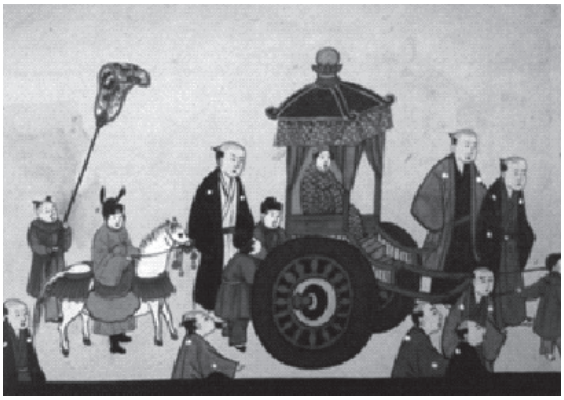
13　レー・グエン・リュウ「フエの古代文化――宮殿の文化生活」（フエ、トゥアンホア、2006 年）とグエン・ダック・スアン「民間と宮殿での淑女の物語り」（ハノイ：女性、2011 年）、項 122 ～ 123 を参照。

14　この人物については、ベトナムの史料ではあまり言及されていないが、日本の史料には出身地や行動、イメージなどがよく記されている。日本在住中は地元の人々から非常に尊敬され、愛されたようだ。死後、神社に奉られ、毎年彼を偲んで長崎の諏訪明神祭りが開催されている。荒木一族の系譜の一つは展示会で披露され、その中には商人荒木宗太郎の人生およびキャリア、そして日本とダンチョンとの間の友好関係構築に対する貢献や、来日した後の妻への愛情について記した文書がある。

根付きの車の中に座り、後ろには側近団が続く（写真 23a と 23b）。この絵は大阪の中之島図書館の所蔵物である。

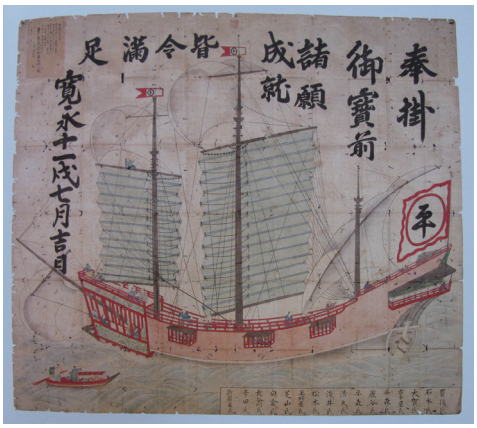
写真 22　アニオー姫がベトナムから日本へ持ってきた 17 世紀の木製枠の鏡

a



b

写真 23a–23b　崎陽諏訪明神祭祀図絵巻（19 世紀）



左：写真 24　木材に描かれた安南渡海船額絵（17 世紀）
右：写真 25　紙に描かれた末次船の絵馬の写し絵（19 世紀）

a

b

c

d

写真 26a–26d　四巡絵巻物（19 世紀）

6.　菱川孫兵衛画家が 1647 年に木材に描いた安南渡海船額絵（68.7cm × 79.8cm）。日本の商船がスーダンチョン（広南国）へ行って交易している場面を描いている（写真 24）。この絵は滋賀県の日牟禮八幡宮寺院に保管されており、日本政府によって国の重要文化財の指定を受けている。

7.　19 世紀に紙に描かれた末次船の絵馬の写し絵（153cm × 186cm）。朱印船を描いている。17 世紀にホイアンに渡って交易した 16 人の日本人商人の名前が書かれている（写真 25）。この絵は長崎歴史文化博物館の所蔵物である。

写真 27　徳川吉宗将軍が輸入した象のうち 1 頭を描いた絵

8.　緒方鍛工画家が 19 世紀に描いた四巡絵巻物（487cm × 27.5cm）。将軍徳川吉宗（1684 年～ 1751 年）がクアンアンで購入し、1728 年に日本に持ち帰らせ、京都御所にある中御門天皇（1701 年～ 1737 年）に「謁見」させたり、1729 年にランス Reign 王皇（1654 年～ 1732 年）に「謁見」させた 2 頭の象を描いた絵（写真 26a–26d）。この絵は現在関西大学図書館で保管されている。

9.　象を描画した 19 世紀の彩色画。徳川吉宗将軍がクアンアンで購入し、1728 年に日本へ持ち帰らせた 2 頭の象のうちの 1 頭を描いている（写真 27）。この絵は現在関西大学図書館に保管されている。

その他、関西大学図書館には、1738 年に日本に輸出された 2 頭の象を描いた絵や下絵がいくつも保管されている。そして、長崎港に帰港してから京都を経て江戸へ連れていかれ、将軍徳川吉宗、中御門天皇やランス Reign 王皇に「謁見」させられるまでの、日本での象の旅についての記録も保管されている。

＊　＊　＊

以上が、我々が「16 世紀～ 18 世紀における日本とベトナム中部との関係」というテーマで研究を進める中でアプローチ・考察した、16 世紀～ 18 世紀における日本とスーダンチョンの外交・交易・文流を反映した史料および物品である。これらの史料と物品は、これまで日本人研究者とベトナム人研究者による多くの先行研究で考究・発表され、日本の複数の展覧会で展示された。主なところでは、2013 年 6 月 14 日～ 2013 年 9 月 6 日にかけて、九州国立博物館で開催された「The Great Story of Vietnam」展示会がある。しかし、大量の史料と物品が図書館や文書所に厳重に保管されていたり、聖域で奉られていたりするため、アプローチ・考究が非常

に難しい。縁あって、我々はこのような史料と物品へアプローチする機会に恵まれ、それらに関する情報や写真を収集し、テーマとして整理し、本セミナーで興味を持っている人々に紹介することができた。

ただし、これはまだ第一段階の概要的な紹介である。我々は引き続きこれらの史料や物品を解析・考究し、遠い過去の日本とスーダンチョンの特別な関係を知ることのできるものをさらに明確にしていきたい。学識者や興味を持っておられる方々からの意見を楽しみにしている。ありがとうございました。

参考文献

1. Kyushu National Museum. *The Great Story of Vietnam*. Kyushu: TVQ Kyushu Broadcasting Co., Ltd. and The Nishi Nippon Shinbun Co., Ltd., 2013
2. Kikuchi Seiichi. *The 17th century maritime map of Jiaozhi bound junk ships: Archaeological investigation in Hoi An*. Paper at Conference on Nguyen Vietnam: 1558–1885, Hong Kong Chinese University, May 10–12, 2012
3. ファン・ハイ・リン「徳川吉宗将軍のクアンアン象」『ダナン経済社会発展』第30号、2012年6月、項39～48
4. 沖縄考古学センターの研究者である金城亀信が提供した首里城遺跡の発掘結果の概要的な報告（日本語と英語で）。タイトルと出版年が不明。全部で13項あり
5. レー・グエン・リュウ『フエの古代文化――宮殿の文化生活』フエ、トゥアンホア、2006年
6. グエン・ダック・スアン『民間と宮殿での淑女の物語り』ハノイ：女性、2011年